

グアム日本人学校における国際理解教育の実践

前グアム日本人学校 教諭

宮城県栗原市立栗駒小学校 教諭 熊谷 浩

キーワード：国際理解、英語教育、現地校との交流学習、他国の日本人学校との交流学習、校内研修

1. はじめに

グアムは、日本から南東に約2500kmに位置し、太平洋にあるマリアナ諸島南端の島である。

人口は約16万人で、多種多様な人種の人たちが生活している。そのおおよその内訳は、チャモロ人（40%）、フィリピン人（24%）、アメリカ人（15%）、そのほか韓国人・中国人・日本人など（21%）となっている。

グローバル化の進展により、グアム日本人学校に通う子ども達にも変化が生じてきている。現在の園児・児童・生徒の半数以上が片親か両親ともに日本以外の出身の子ども達になってきている。そのような状況のもとで、日本人学校に通う子ども達に、これからの時代を生きていくために多様な価値観の中で、異なる文化をもった人々と共に生きていける力を培っていかねばならない。そこで、国際理解教育に視点を当てた教育を進める必要性と日本のすばらしさを感じ取らせる指導の推進を感じ、実践を行った。ここに、その概略を紹介したい。

2. グアム日本人学校の国際理解教育

(1) グアム日本人学校の英語教育

グアム日本人学校では、国際理解教育の一環として、週3回（3時間）英語の授業を設定している。その目的として、次の2点である。

○ネイティブの講師による英語を使用した英語授業により「読む」「書く」「聞く」「話す」の4領域にまたがる総合的な英語運用の力を育成すること。

○アメリカやグアムの文化をテーマに調べたことや自分の考えを英語でまとめて発表する英語でのプレゼンテーション能力の育成、自国文化や異文化に対する関心や理解を深めること。

さらに、その指導に当たっては、

◇経験豊富なネイティブの講師（H28.3月現在4名）を採用し、英語での授業を行う。

◇日本人教師（3名）が各クラスの授業を観察したり、毎日帰宅時までに与えられる講師の授業反省用紙を参考にしたりして、児童生徒の様子や授業の進度などを把握する。

◇自国文化・異文化理解の授業では、調べ学習と英語でプレゼンテーションを行い、発表ごとに英語講師が「授業全体への取り組み」「書く力」「話すスピード」「声の大きさ」「顔の向き（姿勢）」を観点にして、ABCとコメントで評価する。

◇年2回、前期と後期（6月、2月）に英語でのプレゼンテーションを行う。

以上の4点を中心として英語教育が進められている。

児童生徒は、能力別のクラスに編制され、学習を行っている。小学部1年から段階的な指導が行われ、英語力の向上が図られている。ネイティブの先生方は、児童生徒の実態に合わせて、進度を調整したり、ゲームやテキストを読み物教材にしたりするなどの工夫をしている。その努力もあり、小学校段階でかなりの力が付き、英語技能検定において2級を取得する児童が増えている。

(2) 現地校との交流学習

グアム日本人学校では、英語の時間で学習したことを活かした国際理解教育の一環として、次のことを目的として年に1～2回の現地校との交流学習を行っている。

○広い視野をもち、異文化を理解し尊重する態度や、異なる文化をもった人々と、共に生きる資質や能力を育てる。

○自分の考えや意見を英語で表現し、意欲的にコミュニケーションを図る能力を育てる。

○日本の文化や習慣に対する理解を深め、日本人としての自己の確立を促す。

赴任中、小学部は4回、中学部は3回の交流学习を行った。小学部はいずれもグアムの公立学校で、マンガラオのプライス小学校、イナラハンのイナラハン小学校と2回、そしてデデドのアダカオ小学校との交流学习会を行った。中学部は、Harvest Christian Academy、Ocean Middle School（共に私立学校）との交流学习会を行った。ここでは、小学部の活動についてのみ紹介する。

交流会での内容を何にするかについてグアム日本人学校からの提案として、まず、年齢に合わせた集団同士での交流活動をする。次に、同年齢集団からパートナーを決めそのパートナーとの交流活動をする。さらに、異年齢の集団を作り、互いの文化を紹介し合う交流活動をする。を基本として要望を行った。

これをもとに交渉を進めるが、連絡が途切れたり、計画の変更が必要になったりするため、交渉する係は大変苦勞をしていた。また、当日になって子ども達同士の活動が十分に行えないこともあった。しかし、現地校の先生方と日本人学校で教えるネイティブの先生方の力を借りて充実した交流学习を行うことができた。

①現地校との交流学习の実際

基本的な活動以外で、現地校との交流学习での出来事や、日本の学校と違う点について紹介したい。

○プライス小学校との交流学习（訪問）

縦割り班での学校見学を行った際、現地校の授業を見ることができた。教科書を見ると、分厚く、教科ごと1冊ずつで、小学校で習うことが全部載っているものだった。そして、それは学校備え付けで教室に何冊も置いてあった。個人所有の日本との違いに児童も驚いていた。

○イナラハン小学校との交流学习（1回目：来校）

日本の文化を体験してもらうため、体育館で「剣道の型」を披露（体育の教師）した。イナラハン小の子ども達は、竹刀と防具に興味を示していた。実際に、竹刀を手に取り、防具を着けた先生に打ち込むと大きな歓声が上がった。気合いを十分に、打ち込む体験は、日本人学校の児童にとっても初めてであり、参加したすべての子ども達に日本文化（武道）についての関心を高めることができた。

○イナラハン小学校との交流学习（2回目：訪問）

この日のイナラハン小は、全校あげての「キャリアデイ」を企画し、銀行員、電気通信、弁護士、ホテルマン、消防士、自然保護管、大学教授（アメリカ文化）など、10数種類にもおよぶ様々な職業に就いている方々が講師として学校に来ていた。発達段階を考慮し、話を聞いたり体験したりする活動が決められ、時間を区切りそれぞれの職業について学ぶことができた。中でも、環境に悪影響をおよぼす生き物（有害外来種）を捕獲することを仕事にしている方が、本物の毒ヘビを出したときには驚きであった。日本では、全校あげてのキャリア学習は、なかなか実現できない。しかも、多種多様な職業人から話を聞く機会を小学校段階から設定することは子ども達にとっても有益なことである。今後の日本人学校における進路指導やキャリア教育推進の参考になった。

○アダカオ小学校との交流学习（訪問）

各教室での交流の途中で「トイレに行きたい」という子がいた。先生はその子にチケットを渡し、それを持って教室から出て行った。先生に「チケットはどうして持たせるのか」と尋ねると、「無断で授業を抜け出たのではないかと疑われるから渡した」と答えが返ってきた。

その後、教室移動のため廊下に出ると、そこには多くの子ども達が休憩時間を各々楽しんでいて、驚いたことに、チョコレートやチップス、ジュースなどを食べていた。学校で軽食の所持が認められていて、ほとんどの子どもが食べていた。日本とアメリカとの学校生活の違いを感じる出来事であった。

以上、現地校との交流学习についてである。継続的な交流会を通して、異文化を知り、理解し、尊重する態度や、異なる文化をもった人々と、共に活動していこうとする心情を育て、そして、コミュニケーション能力高め、さらには日本の文化や習慣に対する理解を深めることができることを、児童の姿を見て感じた。

(3) 他国の日本人学校との交流学習

国際理解教育をさらに推進するために、他国の日本人学校中学部と交流活動を行った。交流校から、各校の特色や各地域の特徴などの情報交換によって、国や地域による文化や習慣の違い等を理解させ、自校の特色や現地への理解を深めることができるのではないかと思い交流活動を行った。

交流の方法は、ニューデリー日本人学校を拠点校として、E-mailを使い情報交換と学習成果物のデータを交換し合うことを通して交流学習を行った。交流のねらいは、「世界各地の日本人学校及び学校所在地の特色を知るとともに自校・地元の特色への理解を深めること」とした。

交流学習参加校は、ニューデリー日本人学校・ジャカルタ日本人学校・ソウル日本人学校・サンパウロ日本人学校・ミラノ日本人学校・フランクフルト日本人学校・グアム日本人学校の7校で行った。

①学校紹介カード・国紹介カードの交換

学校紹介カードと国紹介カードを交流校それぞれが記入し、拠点校に送る。集まったカードを交流参加学校へ拠点校から送られる。そうして交流学習が始まった。

これらのカードを書くときに、子ども達は、「グアムを知らない人にグアムをわかってもらいたい」と内容を検討することにした。作業を進めていくうちに、自分たちだけでなく校長先生までも巻き込み、パンフレットやガイドブックに載っていないグアムを知らせようと楽しみながら作業に意欲的に取り組んだ。

他校からのカードが届くと子ども達は、興味深く読む姿が見られた。交流校がある国の位置を地図で調べたり、書かれていることについて自分たちの生活やグアムと比較して話し合ったり、知らない国や土地のこと、自分たちと同じ日本人学校でも多くの違いがあることを知ることができたようだ。

学校紹介カードと国紹介カードのたった2枚のカードをきっかけとして、他校からは質問や感想が送られ、またこちらからも質問するなど、交流が盛んになった。質問の内容は、「暮らしていて、苦労することは何か」「カルチャーギャップを感じることはあるか」「特色のある学校行事は他にどんなものがあるか」などその地域をもっと詳しく知ろうとするものや、海外での生活の大変さについて聞く内容であった。

この活動を通して、自分たちが住むグアムと、交流校がある国や地域を比較し、そこに住む人々が日常的に感じていることを知ることで、自分たちのグアムのよさを再発見する機会となった。また、自分たちと同じように生活への不安や問題点があることを知ることで、自分たちが住むこのグアムをより良くしていくためにどうしていったらよいかを話し合うことができた。

②学習成果物の交換

それぞれの学校で行われている学習の活動発表集会の様子の写真や、学校行事（修学旅行の事前学習等）の成果物を交換し合った。各校の情報や成果物を通して、より具体的に学校の特色や国や地域の文化を理解させることができた。グアム日本人学校からは、修学旅行で行った日本（東京）についてプレゼンテーションした資料を送った。

この交流を通して、子ども達は自分たちの住むグアムはもちろん、交流校がある国や地域のことについて学習する機会を得た。そして、様々な資料の交換を通して、その国の文化や人々の生活に触れることができた。

3. 国際理解のための校内研修

毎年、夏季休業中に校内研修の中で現職研修として、国際理解（現地理解）につながる研修を行っている。

1年目は、太平洋戦争記念館（War in the Pacific National Historical Museum）と太平洋戦争国立歴史公園アサンビーチで自然観察を行った。太平洋戦争記念館では、アメリカサイドから見た太平洋戦争についてスライドや職員の話の聞くことができた。アメリカサイドとは言え、戦争の悲惨さは変わらず、命を大切にす気持ちや家族を思う気持ち、そして二度と戦争をしてはいけないということは共通している。被害者と加害者があるが、互いに理解し合い、平和な世界を創って行かなければならないと感じた。

太平洋戦争国立歴史公園アサンビーチでは、ビーチの生き物やジャングルの植物と生き物の環境について実地

で研修することができた。

2年目は、グアム大学（UOG：University Of Guam）の教授から、グアムの植物、昆虫などについて教えていただいた。映像を見ながら、わかりやすく説明してくれた。今まで名前がわからなかった植物や昆虫について知ることができた。その後、大学の校内を散策し、植物や昆虫を探した。中でも、「サイカブト」（外来種）と言われるカブトムシが、ヤシの木をえさとするため、木の幹に大きな穴を開け木をどんどん枯らしているということだった。自然保護の大切さを考える機会になった。

3年目は、グアム・コミュニティ・カレッジ（GCC：Guam Community College）で、アメリカ人が行う日本語の授業を参観した。GCCは、短大で、社会人も多く入学している。日本語の教室があり、日本語がどのように教えられているのか授業の参観と、その後、先生を囲んで話をお聞きした。

授業は、単語やセンテンスを繰り返し発音したり、状況に応じて言葉を使い分けて話したりする授業で、和やかに、楽しい雰囲気の中でICT（情報通信技術）やフラッシュカードを効果的に活用して進められたすばらしい授業だった。

先生は、アメリカ人であるが、日本で生活した経験があり、教室環境も日本の絵本や絵、提灯、習字などの日本文化があふれていた。授業を受けている学生のほとんどが社会人で、日本語を使えるようになり、職場で生かすために勉強しているとのことだった。ホテルやツアー関係の観光業が盛んなグアムでは、日本語を身に付けることも強みになるのだと思った。

参観後の話し合いでは、日本語を教える先生のご苦労や、授業に対する先生の姿勢について話を聞くことができた。教育への真摯な姿勢と情熱を感じることができ、私自身見習うことが多くあった研修会となった。

赴任中の3年間、これらの研修を通して、あまり知ることができないグアムの歴史や自然環境、外国における日本語教育について学ぶことができた。

4.まとめ

広い視野をもち、異文化を理解し尊重する態度や、異なる文化をもった人々と関わりながら共に生きることができる児童生徒を育成するのが国際理解教育である。グアムには、様々な国や地域出身の人々が生活している。その人々がそれぞれの文化や習慣を大切にしながら生活していることをこの3年間で実感することができた。また、そのような中で、日本と同等の教育を提供するという日本人学校の責務が大きく、国民性や地域性、歴史的背景などで考え方の違いなどによって教育の難しさも感じた。しかし、英語教育、現地校との交流学习など、国際理解教育の取り組みの積み重ねがグアム日本人学校の子どもの国際性を育てているのだと思う。

家族の出身地や育った環境、生活経験に大きな違いを持つ子ども達それぞれを尊重し合い、仲よくすることができるグアム日本人学校の子供達。世界に大きく羽ばたいてほしいと思っている。

最後に、3年間という研修の機会をいただけたことに深く感謝いたします。ご尽力くださった多くの方々、グアムに於いて様々なご支援をいただいた多くの方々に心からお礼を申し上げます。